校友時報

昭和39年12月19日
編集人兼發行所
秋田県能代市畠町道分2
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 大勝堂印刷所

実りのあった二学期

この収獲を来年にどう生かす

また冬がきた。冬という季節は我々東北に住む者に反省することを与えてくれる。こたつの中で、暖い部屋の机にむかって、我々は瞑想にふけり、夢を、理想を木枯の音を外に聞きながら思いうかべる。そして反省する。二学期は終った。あっという間のでき事であるとも、ずいぶん長かったとも感じられるのであるが、静かに目をとじてふりかえってみよう。そしてそれから来年、将来に向う何かを、建設的な何かを得ようではないか。

黙とうで始まった二学期。夏休み中水の事故でなくなられた畠田繁滴君（三年生）の冥福を祈って、二学期最初の日は始まった。

そして各運動部の活躍。九月二十二日、我々の祭典能高祭の幕が切っておとされた。あのすばらしかった前夜祭、全校生徒二千名、若い エネルギーが結集し我々の祭典を大成功させた。このエネルギーはあらゆる困難にうちかつことができると思う。みんなで手をとりあえばあれだけの仕事ができるのだ。（万国の学生よ団結！）

十月の青空の下にオリンピックは開幕をむかえ、世界の全人類の若い代表によってくりひろげられた。本校の誇るべき小野喬選手、菅原貞敬選手の姿もそこにあった。これにつづく選手が我々の中からでることができるとすばらしい。

十一月の初旬、修学旅行列車は数々の思い出をのせてひた走りに走る。強行軍であったが、二年生にとってたのしいものであったにちがいない。

そして文化局同好会、P・F・CRの名の下に本校初のハム局を設置した。

しかし、機械を置く場所がなく学校側と交渉中である。また構内の整備も進んできた。まず野球部室横の自転車置場が完成した。そしてグランドには鉄棒が作られ、体育の時間のほか放課後も利用されている。校門前にうっそうと茂っていたプラタナスも、今では素裸の状態で寒さが一段と身にしみる。そのプラタナスの下にりっぱに復活した道路が中和通りまで通っている。前号で道路の悪かったことを掲載したが、現在は面目一新し登下校の際の不便さがなくなった。さてこの二学期を深く反省し来学期を意義あるものにしよう。

研究授業行われる

去る十一月二十一、二十二日の両日、本校において秋田県高等学校教育研究会英語部部会研究大会が開かれ、県内から九十二名の先生方が本校にお見えになった。

一日目の二十一日には各学年一クラス づつの研究授業が行なわれ同日午後からは、秋田大学納谷友一教授の講演および研究分科会などが行なわれた。なお翌日もひき続き開かれ、東北大学村岡勇教授の講演があって盛会裏に幕を閉じた。

部説

盛んな文芸活動に思う

個人やグループで文芸誌、雑誌、新聞などの発行が盛んになっている。いわばルネサンスの現代版である。沈滞ぎみであった本校の文芸活動がにわかに開花したという意味よりも我々高校生に一発、「活」が入ったという感じがする。

最近の高校生は、ものを考えないとよくいわれるがそれはたしかである。その原因は〝現代〟という時代環境などの複雑さに起因しているのであろうが、この「ものを考える」ということは人間の一生を考えた場合我々の年頃には是非とも必要なことである。人生観世界観、恋愛観等を考える時期に我々はおかれているそしてそれらのことを考える機会も多いのだ。それなのにあまり我々は考えることをしない。たとえば、本を読み、文学を研究する。また我々の生徒会の発展の方法を考えるなどたくさん「ねばならないこと」はあるのだ。そしてそれらが現在、将来を通じて自分の生活の上になんらかの形であらわれることはたしかである。しかし残念ながら「考える」ということが極めて少数の者の仕事であると思われている現状である。我々は「考える」ということに対して恐怖の念を抱いているのではないか、またただその日その日を安易に楽天的に暮しておればよいと考えているのであろうか。それとも考える以前になんなことは常識だと社会通念というものであるとすると常識とは偉大なるペテン師である。なぜそのの常識を追求しないのか。ともかく考えることを我々が敬遠していることは否めない。

いったいこの現状を打破し、我々高校生活の中味を充実させるにはどうしたらよいのか。

ある文芸誌が「諸君、我々高校生はもっとみつめなければならないのではないか。危険性、矛盾をはらんでいる問題がたくさんある。仲間達よ、俺達の時代世界平和を求めよう。」と我々に呼びかけている。また「ポール・ヴァレクが一九三一年十月チューリッヒ大学で講演したその冒頭のことばに『諸君、嵐は終った。にもかかわらず我々は嵐がおころうとしているやさきのように不安である。』これは第二次大戦が終った直後にいわれたのであるが……。」という文が載っていた。つまり我々は不安な世界に生活しているのだということであろう。これらは我々の一部の生徒ではあるが、早くもこのことに気がついたのである。この「考えるヒント」を文字化し広く浸透させようというものがこの発刊となってきた文芸活動であると解釈する、事実これらの文芸誌の編集目的は、高校生の「ものぎめくらの開眼」にあるという。我々はこの一部の生徒の活動をどう生かしたらよいか考えるべきではないだろうか。

また これら文芸誌は我々にいろいろな話題を提供してくれる。「朝学校にきて弁当を食い、終業のベルと同時に学校から飛び出す」生活の中になんの意味があろうか。もっとなんでも話し合うべきである。自分殻にとじこもっているだけでは進歩がない。一とたび我々に話題が与えられると活発な討論が始まる。いい例がホームルームでの討論会だ。我々は各自、それだけのセンスをもっているはずだ。この文芸活動が提供してくれる話題について放課後でも教室や校庭で話し合う風景が見られたらこの活動は成功ということになるだろう。ともかく我々の中の一部の者でもこの重大なことに気づいたことは学校生活におけるしゅうかくで、更に発展を期待する。

生徒自身の積極的活動を

後期生徒会役員決まる

後期生徒会会長、副会長の選挙は十月二十九日行なわれた。今回は三名の立候補者が生徒会長の席を争い、副会長選挙は立候補者が一人のため信任投票の形で行なわれた。その結果会長には二年G組の今立孜君が選出され、副会長には二年F組の鈴木康中君が信任された。

新会長の今立君はこれからの活動にあたり次のように語った。

「生徒会を機械しているのは、いうまでもなく、今この新聞を読んでいるあなたにほかならない。ところで、その活動について、なるほど会長がおり、企画部があり、生徒委員等がおります。

しかし、彼らの活動が即生徒会活動となるのかもちろん主導的立場にあるとはわかる。が決してそれら一部の人の活動をさしているのではない。生徒会活動の本来の姿とは、生徒自身の、学校という人間交流の場を生かしての活動だ、と言いたい。それぐらいの自覚はあって然るべきではないだろうか。心親しい友との心からの話し合いの場をいたる所に作ってもらいたいものです。」

弁論部では十一月五日、「文化祭の意義」―〝我々は何を受け継ぐべきか〟と題した討論会を行った。

これは「今年の文化祭は成功した」といわれているがこの意味は何か、そして、我々は来年の文化祭を成功させるにはどうしたらいかということを討論したものである。内容は「成功」ということばをこの二つに

文化祭をより充実させよう

弁論部討論会開く

時評

宇宙船に思う

平野忠夫

この秋十月、全国のおびただしい数の聴視者と大観衆の興奮の渦の中で第十八回東京オリンピック大会が華々しく催されていたその時に、東京の空の遥か遥い向うの空間では三人乗りの宇宙船が人知れず静かに運行されていたのです。数万年前の新石器時代に人間の心の中に神という観念が誕生したと言われるが、頭初その広大さ、不可思議さのゆえにきっと、宇宙そのものが神と考えられたことだろうし、その神なる宇宙の心こころ深く恐び寄る者には身近かに一人の観客もなくその営みの狂おしいまでに静寂なものであろうことを対称的に深く感じさせられました。神の名に近い筈のオリンピック大会よりも冷酷無情の代名詞の様に思われがちな科学、その科学の結集になる宇宙船の与えるものがより精神的である点が不思議でもあり嬉しく思いました。宇宙開発に巨費を投ずる前になすべきならない多くの問題のあることも確かな現実の姿ではあるが、海水中で孝生えた生命が地上にはえ上がりやがて宇宙空間へ雄飛するのが生命あるものの宿命的なコースであるものの宿命的なコースであるものと思われるし、宇宙開発は人類に課せられた一つの宿業なのかも知れません。

宇宙船のもたらす科学的資料には人類が地球上では知り得なかった貴重なものが沢山ありますが、がまして宇宙船がわれわれに与える精神的なものに注目したいと思います。

宇宙船は人間の考え方にローカル（局部的）なのにかえてグローバル（地球的というか大局的というか）なものを導入するのに大きな貢献をしたと思います。それは地球上に平和が、人類に夢が絶対に必要であることを教えているからです。

科学者は奇想天外なことを発明発見して人をびっくりさせ科学に対する恐怖感をあおることを目的としているものでないことは当然のことながら、現象面においては科学の力の偉大さに圧倒されて恐怖と冷酷の印象を強く感じさせられることが多いと思います。

けれども現代の科学は夢を追う者の集団ロマンチストの想によって進展しているのであるから、科学の成果が単に科学的知識の向上のみならず精神面に及ぼす影響にも十分関心を示しながら宇宙船の行方を見守ってもらいたいものだと思っています。

（物理担当）

期待される P・F・C同好会

PFCが新しく発足した。これは二、三年前まであったのが同好の人が少なくなってつぶれた形であった。こんど三年生が中心になってこのいわゆるペン（Pen）、フレンド（Friend）、クラブ（Club）を再建したもの。同好会であるが一年生を中心に十一名の会員がいる。これから市内の高校と交歓を続けたり、県外の学校とも交歓しあい、広く学校間の親善を深めてゆく重要な仕事がたくさんあるが、さしあたって北高校と連絡をとり、市内のポストを清掃する予定である。新しくできた同好会PFCは意外な活躍をするもの期待される。

新聞で育つ若い芽正しい目

―能高新聞部―

がくせいのみせ
キムラヤ
学用品■事務用品
はたまち 2~5535

D.P.E
スキー写真を
カラーで
カメラ
三羊堂
新銀座 2—4946

あっ！バンク
それ小玉
小玉自転車店
中和通り（二）二六一三

X'mas
アイスケーキ
はちみつカステラ
松雲堂
柳町 二—二六一三

写真と
■美容
唐津
畠町下 2—5263

学生の店
アベ文具店
ノート
鉛筆
その他
中和通り（二）—五三一一

立体音響の喫茶
四季
柳町